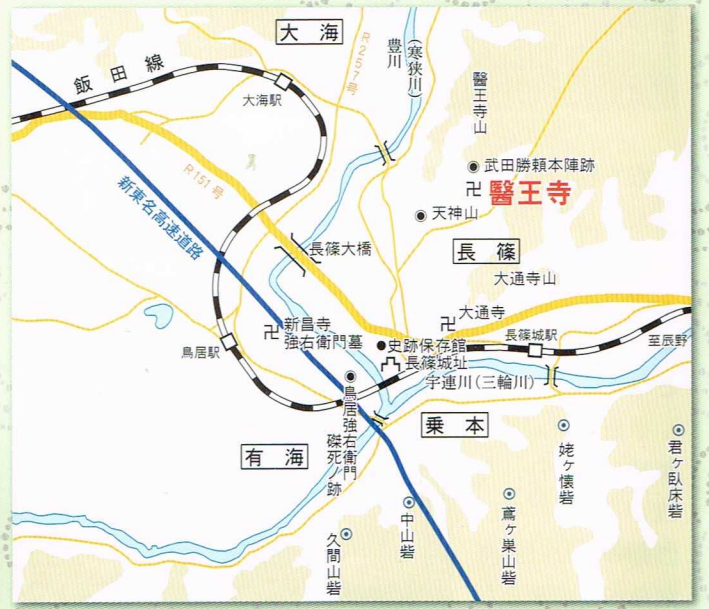


長篠合戦の郷でお昼ごはん

精進御膳　1,500円（税込み）※要予約

※内容は季節により多少変わります
予約は　7日前までに5名様以上でお願いします。

お問合せは　醫王寺　電話番号 0536-32-0136 まで

醫王寺の沿革

かつて篠窪と呼ばれていたこの地には、利修仙人が鳳来寺の杉を以って彫像したという薬師如来と行基菩薩が彫刻したとされる阿弥陀如来の二木像が祀られた堂宇があった。

明応７年(1498年)、後に医王寺第二世となる琴室契音は、鳳来寺医王院末であるこの堂宇(小庵)に小住した。

永正11年(1514年)５月15日、僧琴室契音の徳を慕う近郷の衆徒が堂宇を改築し大伽藍を造成した。これを機に「長篠山医王寺」と号し、師である克補契嶷を御開山として迎えた。これにより曹洞宗の一寺となる。

克補契嶷御開山像

同年12月20日には、琴室契音が第二世として着任した。

天文11年（1542年)、野田城初代城主菅沼定則より、梵鐘を寄進される。

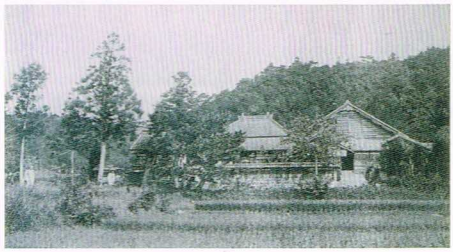
永禄年間(1558年～1569年)、今川義元の世継ぎ今川氏真より茶湯料五貫文が寄進される。さらに天正元年(1573年)には、長篠城城主奥平貞昌より水田一町歩が寄進された。

天正３年(1575年)５月、甲斐の将武田勝頼が勢力を東海地方に伸ばすため一万五千の兵を率いて長篠城を包囲した。時の城主奥平貞昌は城兵五百でこれに対峙した。

世に名高い「長篠合戦」において、武田勝頼が本陣をかまえたのが、医王寺である。

慶長８年(1603年)、奉行上書、高41石５斗５升１合の朱印が寄進され、医王寺の伽藍は江戸時代を経て、整えられていった。

明治39年(1906年)９月９日、失火により伽藍は全焼する。御本尊と過去帳は無事に搬出され難を逃れた。



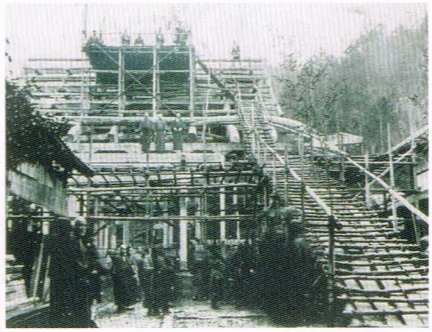
火災少し前の医王寺

明治41年に、新城市小川の菅沼貴一氏より旧船宿を譲り受け、庫裡の再建を果たす。

大正13年(1924年)９月、本堂が落成する。昭和34年には開山堂と位牌堂が再建された。

さらに昭和51年に書院が建築された。

平成14年(2002年)10月20日、庫裡が落成する。伽藍の再建は鐘楼堂を残すのみとなり、ほぼ概容が整った。



本堂建前

近年では、本堂の耐震工事・駐車場の舗装など時代に合った整備が着々と進められている。

平成26年(2014年)10月26日、開創五百年記念祭が盛大に執り行われた。

庫裡落成

武田勝頼ゆかりの地

○ 「武田勝頼本陣地跡」医王寺山

天正３年(1575年)武田勝頼は、「長篠合戦」で医王寺に本陣をおいた。『鳳来町誌』によればその理由を「長篠城包囲攻撃だけでなく、救援軍を迎撃して家康と対決する場とした」とある。

○ 「武田軍の火縄銃」

『長篠合戦図屏風』には武田軍の火縄銃が数丁描かれており、500丁もの火縄銃を所有していたことが分かっている。『鉄砲と日本人』には「戦いの後、長篠城の壁土は激しい銃撃でふるい落とされ、籠のようになっていた」と記されている。

○ 「武田軍の遺品」民俗資料館（庫裡２Ｆ）

「長篠合戦」の折に武田軍が残したものである。六十二間篠の兜、陣茶釜、大身の槍、矢じりなどがある。瓦は長篠城の野牛門鯱の断片である。

○ 「片葉の葦」弥陀池

伝説では、出撃前夜、武田勝頼の夢枕に葦の精が老人の姿となって現れた。老人は、勝頼を諫め戦いを避けるよう勧めたが、勝頼はこれを無礼とし、太刀で老人の腕を切り落とした。翌朝、境内の弥陀池を見ると、茂っていた葦は全て片葉になっていたという。